

伝統文化教育を中心とした教科等横断的なカリキュラムの開発
ーグローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指してー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-05-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00058141

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



伝統文化教育を中心とした教科等横断的なカリキュラムの開発
—グローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指して—

1. はじめに

(1) 研究テーマの設定について

- ①本校の教育目標と研究の経緯
- ②E S D 研究
- ③E S D 研究を基盤とした伝統文化教育研究

2. 研究の方針と目標

- (1) 教科等横断的なカリキュラムの開発について
- (2) 伝統文化教育について
- (3) 研究の方策・研究体制

3. 平成 29 年度（1 年次）の取組

- (1) 具体的な取組と実践
- (2) 成果と課題

4. 平成 30 年度（2 年次）の取組

- (1) 学校全体のグランドデザインを基にした各教科等の指導の工夫
- (2) 学校全体で育成する資質・能力の設定
- (3) 成果と課題

5. 令和元年度の取組

- (1) 各教科等の授業実践
- (2) 学校全体のカリキュラムマネジメント
- (3) 成果と課題

伝統文化教育を中心とした教科等横断的なカリキュラムの開発 —グローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指して—

1. はじめに

本校は平成 29 年度より二年間、国立教育政策研究所の研究指定を受け、伝統文化教育に取り組んでおり、今年度は研究三年次である。本校が伝統文化教育に関する研究に取り組むことになった背景としては、次の二点があげられる。

- ・本校の学校教育目標と伝統文化教育との関連が深いこと。
- ・これまでの本校の教育研究の成果が伝統文化教育の研究に生かせること。

これらのことについて、次に説明を行う。

(1) 研究テーマの設定について

①本校の教育目標と研究の経緯

本校は、教育目標とそれを受けて目指す生徒像として以下のように掲げている。

学校教育目標：「自由闊達な気風の中で、広い視野と豊かな人間性を持ち、将来、社会的使命を果たす生徒を育成する。」

目指す生徒像：①自ら考え学ぶ生徒

②お互いに認め合い、助け合う生徒

③心身ともにたくましい生徒

学校全体の教育活動の中でこれらの実現を目指し、日々様々な具体的活動に取り組んでいる。また、これらを踏まえてこれまでも年度ごとにテーマを定め、教育実践研究を行ってきた。

②E S D 研究

平成 26 年度からの三年間は学校教育目標の「社会的使命を果たす生徒を育成する」をより効果的に達成する方策を開発するため、E S D 研究を進め学校の各教育活動に環境学習や国際理解学習を取り入れ、その成果と課題について考察を行った。特に平成 26 年度と 27 年度の 2 年間は国立教育政策研究所の研究指定を受け、研究発表会などを通して研究の成果を広く発信してきた。E S D 研究に取り組むにあたり、その前年度までの研究の成果と課題について平成 26 年度本校紀要では以下のように述べている。

「本校では昨年度まで、『思考力・表現力・判断力の育成』を目指し、その中でも特に『思考力』に焦点をあて、課題を解決するために必要な思考力を育成するために、1)『思考の型』を取り入れて、2)『思考するための手立て』を工夫するなど、実践を積み重ねてきた。しかし、生徒が課題を解決する方法を各教科等で学んだとしても、その方法が、教科の枠の中でしか使えなかったり、ある単元のみで特化したりするなど、学習したことの広がりが感じられなかった。昨年

度の本校研究紀要にも、『思考の型』や『思考の手だて』を統合するなどして、『思考力を育成する学校全体の取り組みをさらに深めていく必要性』が課題として取りあげられている。すなわち、生徒には、将来、社会の形成者として必要な、教科の枠を超えた課題解決の力が十分に身につけていないといえる。その中で、本校教員も、内容的に類似している取り組みをつなげたり、教科間で連携して共通して身に付けさせたい力を育んだりすることで、学習したことが広がりを見せ、生徒の教科の枠を超えた課題解決の力に総合的につながっていくのではないかと感じ始めていた。そこで、今年度より、教科の取り組みをつなげ、生徒の総合的な課題解決の力を育む方向で研究を行うことにしたが、そのために、教員全体が共通して取り組める課題解決のテーマとして、E S D (Education for Sustainable Development)を取りあげることにした。」

(金沢大学附属中学校 研究紀要第 57 号 2015)

つまり、E S D 研究に取り組むに当たっては、それまでの本校の教育研究の特長として各教科等が積極的に生徒の資質や能力を育成する手立てについて開発をしているということが長所でありながら、同時に教科間で連携して取り組むことや、教科の枠を越えることで育成をねらうことのできる資質・能力についての考察が不足しているという短所があるという課題があった。そこで、それらの長所・短所を踏まえて学校全体で取り組むものとしても、E S D 研究が適していると考え、取り上げることとなった。

③ E S D 研究を基盤とした伝統文化教育研究

前述のように、本校の教育目標と E S D との目指すところの共通点をスタートとし、総合的な学習の時間や特別活動のみではなく、普段の教科等の授業の中で展開できる E S D を目指して学校研究を始めた。それまでも、本校では、言語活動に注目した思考力の育成に関する研究や思考の型に関する研究を各教科等が取り組んでおり、学校全体をあげて研究に取り組む体制があった。そこで E S D を進めるに当たっては、全ての教科等が関わることを前提とし、教科等横断的なカリキュラムの開発を目指した。3年間の E S D 研究の取り組みの成果と課題は以下のようなものである。

E S D 研究の成果と課題

ア 成果

- ・本研究は、教科等の授業でこのように E S D の授業ができる、といった実践提案型の研究である。教材の「つながり」を図ったユニットや、E S D の実践事例を数多く完成できたことがまずは成果である。
- ・実践が多い能力・態度に関して、生徒も教科等の授業を通して自分に能力・態度が身に付いたことを実感している。
- ・教科等の授業を通して E S D を実践していく方向性が、教員で共通理解できたことも成果である。
- ・カリキュラムマップの作成により、実践の全体像を可視化できたことが成果である。今後、さらなるカリキュラムマネジメントにつなげていくことができる。

イ 課題

- ・能力・態度と教科等の力のさらなる整合性を図ることが今後の課題である。さらに、それぞれの能力・態度を、各教科等がどのように分担していくかを考え、実践していくことも課題である。
- ・カリキュラムマップをもとに実践が少ない分野や能力・態度の時期をどうするか、また、それぞれの実践を、能力・態度間のつながりも含めて、全体的につなげていくことが課題である。
- ・実践提案型の研究から、実際の諸問題解決の研究へと移行するかどうか、そのためにも、総合的な学習の時間との関係を考え、実践していくことが今後の課題である。

(金沢大学附属中学校 研究紀要第 59 号 2017)

E S D 研究の特長をまとめると、本校の特長として以下のことが挙げられる。

- ・各教科等がそれぞれの教科等の特質を踏まえつつ、継続して実践研究に取り組んでいる。
- ・学校全体のカリキュラムマネジメントに関して、全教科等が積極的に関わっている。

このような本校の教育研究に関する土壌を生かし、伝統文化教育を進められるような研究の体制や方策について考えた結果、以下のように研究テーマを設定した。

研究テーマ

伝統文化教育を中心とした教科等横断的なカリキュラムの開発
ーグローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指してー

2. 研究の方針と目標

伝統文化教育を柱として学校の教育研究に取り組むに当たり、本校の特長を生かす研究とするため、次のように研究の方針と目標を設定した。

研究の方針：各教科等の連携による体系的な伝統文化に関する教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究を行い、校外に研究成果を発信する。

研究の目標：

伝統文化教育に関わって

1. 各教科等で学んだことを自分たちの現在や将来の行動につなげられる生徒を育てる。
2. 教科等横断的なカリキュラムの開発を目指す。
3. 伝統文化教育の推進と各教科等の思考力・判断力・表現力との関連性を明らかにする。

(1) 教科等横断的なカリキュラムの開発について

これまでのE S Dの取り組みなどから、本校では教科等が連携して教育活動に取り組む素地がある。この特長を生かして、より効果的な教科等横断的なカリキュラムの開発に取り組みたいと考えた。教科等横断的なカリキュラムの開発に関しては、平成28年12月の中教審答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」に以下のように示されている。

「生きる力」の育成に向けた教育課程の課題

(1) 教科等を学ぶ意義の明確化と、教科等横断的な教育課程の検討・改善に向けた課題

教育課程において、各教科等において何を教えるのかという内容は重要ではあるが、前述の通り、これまで以上に、その内容を学ぶことを通じて「何ができるようになるか」を意識した指導が求められている。特にこれからの時代に求められる資質・能力については、第5章において述べるように情報活用能力や問題発見・解決能力、様々な現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力など特定の教科等だけでなく、全ての教科等のつながりの中で育まれるものも多く指摘されている。重要となるのは“この教科を学ぶことで何が身に付くのか”という、各教科等を学ぶ本質的な意義を明らかにしていくことに加えて、学びを教科等の縦割りにとどめるのではなく、教科等を越えた視点で教育課程を見渡して相互の連携を図り、教育課程全体としての効果が発揮できているかどうか、教科等間の関係性を深めることでより効果を発揮できる場面はどこか、といった検討・改善を各学校が行うことであり、これらの各学校における検討・改善を支える観点から学習指導要領の在り方を工夫することである。

中央教育審議会 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」文部科学省 2016

また、伝統文化教育を通して育みたい資質・能力について考えた時に、次期学習指導要領に向けた指針としての以下のまとめを参考とした。

平成28年8月 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」

現代的な諸問題に対応して求められる資質・能力

(グローバル化する社会の中で)

○グローバル化する社会の中で世界と向きあうことが求められている我が国においては、自国や他国の言語や文化を理解し、日本人としての美德やよさを生かしグローバルな視野で活躍するために必要な資質・能力の育成が求められている。前述(4)で述べた言語能力を高め、国語で情報を的確に捉えて考えをまとめ表現したりできるようにすることや、外国語を使って多様な人々と目的に応じたコミュニケーションを図れるようにすることが、こうした資質・能力の基盤となる。加えて古典や歴史、芸術の学習等を通じて、日本人として大切にしてきた文化を積極的に享受し、我が国の伝統や文化を語り継承していけるようにすること、様々な国や地域について学ぶことを通じて、文化や考え方の多様性を理解し、多様な人々と協働していくことができるようにすることなどが重要である。

※「グローバル人材」…要素 i : 語学力・コミュニケーション能力

要素 ii : 主体性・積極性, チャレンジ精神,

協調性・柔軟性, 責任感・使命感

要素 iii : 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

(グローバル人材育成推進会議)

中央教育審議会 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」 文部科学省 2016

これからの社会において求められる資質・能力の育成を、伝統文化教育を通して行いたいと考えた時、ここで示されている「グローバル人材」の要素 i ~ iii の育成を具体的な目標とすることができる。また、これらの要素は各教科等で独立して育成できるものではなく、各教科等の枠を越えて育成をねらえるものとして適切である。そこで、本校の研究テーマの副題を「一グローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指して一」とし、その育成に取り組みたいと考えた。

また、育成を求められる資質・能力については前掲の記述に続き以下のようにある。

(現代的な諸問題に対応して求められる資質・能力と教育課程)

○このように、現代的な諸問題に対応して求められる資質・能力としては、以下のようなものが考えられる。

- ・健康・安全・食に関する力
- ・主権者として求められる力
- ・新たな価値を生み出す豊かな創造性
- ・グローバル化の中で多様性を尊重しつつ、現在まで受け継がれてきた我が国固有の領土や歴史に関して理解し、伝統や文化を尊重し未来を描く力
- ・地域や社会における産業の役割を理解し地域創生等に生かす力
- ・自然環境や資源の有限性の中でよりよい社会をつくる力
- ・オリンピック・パラリンピックを契機に豊かなスポーツライフを実現する力

○これらが教科等横断的なテーマであることを踏まえ、それを通じてどのような資質・能力の育成を目指すのかを三つの柱に沿って明確にし、関係教科等や教育課程全体とのつながりの整理を行い、その育成を図っていくことができるようにすることが求められる。

「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」 文部科学省 2016」

このまとめを参考に、本校でも教科等を越えた視点で教育課程を見直し、教育課程全体として効果を発揮できる場面について研究としたいと考えた。一年次（平成 29 年度）は全ての教科等が伝統文化に関する学習に取り組み、その中で育むことのできる資質・能力について仮に設定をし、実践研究を進めた。2 年次（平成 30 年度）はその仮説の検証とともに、各実践について検討と精選を進め、教育課程全体の工夫と改善を図った。

（２）伝統文化教育について

伝統文化教育は、これまでも各教科等や総合的な学習の時間などで行われて来た。平成 18 年 12 月に教育基本法が改正され、「伝統や文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う」と言及された。これを受けた平成 20 年 1 月の中教審答申「伝統や文化に関する教育の充実」では、以下のように述べられている。

国際社会で活躍する日本人の育成を図る上で、我が国や郷土の伝統や文化を受け止め、そのよさを継承・発展させるための教育を充実することが必要である。世界に貢献するものとして自らの国や郷土の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を身に付けてこそ、グローバル化社会の中で、自分とは異なる文化や歴史に敬意を払い、これらに立脚する人々と共存することができる。また、伝統や文化についての深い理解は、他者や社会との関係だけではなく、自己と対話しながら自分を深めていく上でも極めて重要である。このため、伝統や文化の理解についても、発達の段階を踏まえ、各教科等で積極的に指導がなされるよう充実することが必要である。

中央教育審議会 「伝統や文化に関する教育の充実」 文部科学省 2008

伝統文化に関する学習内容は、各教科等で積極的に扱うことが改めて強調されている。またその目的は国際社会で活躍する日本人の育成であることとされている。

現行の学習指導要領の施行と並行して、様々な伝統文化教育に関する取り組みが行われている。その一つが平成 17 年より国立教育政策研究所が行った「我が国の伝統文化を尊重する教育に関する実践モデル事業」である。この事業では全国から 100 校程度を募集し、伝統文化に関する教育の教育課程における位置付け、指導の内容・方法などに関する実践研究、そして外部の人材や団体との効果的な連携の方策について研究の課題として設定した。その事業を経て、平成 24 年には同じく国立教育政策研究所が「学校全体としての各教科等の連携による体系的な伝統文化に関する教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究」として研究指定事業を開始し、今年度に至るまで継続して事業を行っている。

また次期学習指導要領へ向けて、様々な動きがある中、伝統文化教育に関しては、平成 27 年 8 月「論点整理」に次のようにまとめられている。

日本のこととグローバルなことの双方を相互的に捉えながら、社会の中で自ら問題を発見し解決していくことができるよう、自国と世界の歴史の展開を広い視野から考える力や、思想や思考の多様性の理解、地球規模の諸課題や地域課題を解決し持続可能な社会づくりにつながる

地理的な素養についても身に付けていく必要がある。

中央教育審議会 教育課程企画特別部会 「論点整理」 2015

自国に関することと世界のこととを同時に広く捉えて、グローバル社会で生きるための素養を身に付けることの重要性が指摘されている。また平成 27 年 12 月の中教審答申の「2030 年を見据えて子供たちの育てたい姿」には「社会的・職業的に自立した人間として、我が国や郷土が育んできた伝統や文化に立脚した広い視野を持ち、理想を実現しようとする高い志や意欲を持って、主体的に学びに向かい、必要な情報を判断し、自ら知識を深めて個性や能力を伸ばし、人生を切り拓いていくことができること。」と述べられており、これからの社会で広く育成すべき内容について、伝統文化教育が担っていくことが示されている。

このような流れの中で、これまでも伝統文化教育に関する多くの実践が行われてきた。それらの実践の課題として、伝統文化教育を担うのは、総合的な学習の時間に集中しがちであり、各教科等での取り組みが希薄になりがちであるということや、目的が自国への愛着や自国の文化の理解に留まりがちであり、世界的な視野の獲得までに至らないということなどが挙げられている。これらの課題を踏まえた上で、これからの伝統文化教育として「互いの文化を尊重する発信型のグローバル化」を教育の中心に据える実践などが、これからの伝統文化教育が目指す方向として挙げられる。

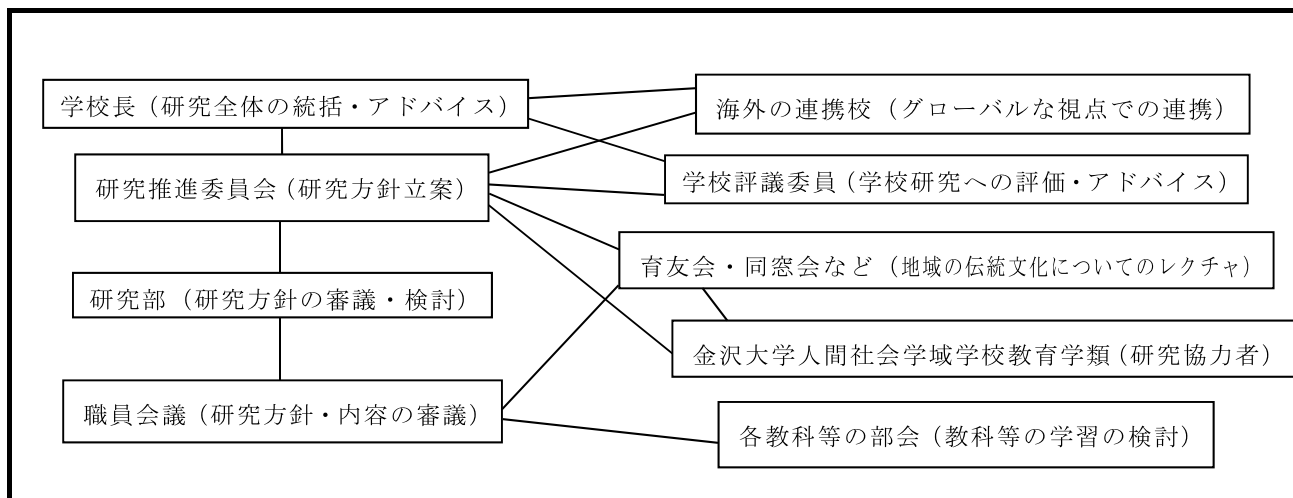
(3) 研究の方策・研究体制

①研究の視点：全ての教科等が関わったこれまでの ESD の授業実践を基盤とする。教科等の学習をベースとしつつ、伝統文化教育にそれぞれの教科等がどのように関わることができるのかを明らかにし、教科等横断的な単元（題材）の開発をする。その上でそれらの学習の中で伝統文化教育を通して、一人一人の生徒がグローバル社会に生きるために必要な資質・能力をどのように身に付けていくのかを検証し、その育成のためにより有効な方策を開発する。

②研究の手立て：ESD 研究を通して得た、教科等の連携やカリキュラムマップ（全ての教科等の三年間の学習の内容やそれらの相互の関連等を一覧表にまとめたもの）の作成の経験を活かし、伝統文化教育に関して、全ての教科等が関わる 3 年間のカリキュラムマネジメントを行う。伝統文化教育を柱として、生徒の視点に立った学習計画の作成を試みる。具体的には以下の通りである。

- ・伝統文化教育に関するアンケート調査を生徒・保護者・教員を対象に行い、伝統文化や伝統文化教育に関する意識の変容について分析する。生徒の伝統文化に対する興味・関心がどのように高まり、どのような資質・能力が身に付いたのかを分析する。
- ・各教科等の授業で生徒の学習過程や思考の様子をワークシートなどの記入の内容から分析する。各教科等で育成したい資質・能力がどのように育まれているのか見取る。
- ・本校研究発表会の場で参会者から意見を求めるとともに、アンケート調査を行い本校の取り組みや生徒の実態について成果や課題を点検する。
- ・金沢大学人間社会学域学校教育学類等の研究協力者（大学教員・大学院生）、金沢大学教職大学院の職員・大学院生などから学校生活や授業での生徒の変容について評価を得る。

研究体制



3. 平成 29 年度（1 年次）の取組

（1）具体的な取組と実践

○校内研究会

伝統文化教育に取り組むにあたり、平成 29 年度に先駆けて前年度 2 月より準備を始めた。国立教育政策研究所の研究指定の申請にあたり、本校での取り組みの方向性を検討し二年間の研究の進め方について計画を立てた。

①平成 29 年度 4 月～11 月

学校全体で伝統文化教育を進めるに当たり、共通して理解しておくべきことを整理し、具体的な実践の在り方について検討を進めた。学校全体で育成をねらう資質・能力について設定をし手、考察を進め、各教科等の授業の中で取り組むことのできる実践の可能性を広げる時期となった。多くの実践を持つことを目標とし、全職員が実践にあたった。

4 月の校内研究会において、研究の計画について全教職員で確認を行った。はじめに、先行の伝統文化教育について概要を把握し、学習指導要領を参考にしながら、今なぜ伝統文化教育に取り組むことが重要なのか、ということについて全教職員が理解し今年度の研究に向けての基礎的理解とした。その中で、本校の研究では、①全教科等が連携して伝統文化教育に取り組むこと ②伝統文化教育を通して育成を目指す資質・能力をグローバル人材の要素 i～iii と仮定して実践に取り組むこと の二つを申し合わせた。学年別のグループに分かれてワークショップを行い、はじめに伝統文化について「生活文化」「伝統文化」「地域文化」「現代の日本文化」などの区分があることを踏まえて、それぞれの教科が伝統文化についてどのような文化を扱い、どのような要素の育成に関われそうかを各自が考えグループごとに表を作成した（図 1）。また、それらの実践の可能性の内容から、実際に今年度中に取り組むものを選び出し、各学年の年間計画表上において各教科等の取り組みを全体で可視化できる表とした（p 11 図 2）。これらの表を職員室の休憩スペースに掲示し、全教職員の目に触れやすいものとすることにより、教科同士が連携したり、教科等横断的な実践について考えたりする材料とした。



図 1
要素 i～iii と関わって扱うことのできる伝統文化の可能性をあげた表

二年間の研究計画（国立教育政策研究所に提出のもの）を基に、具体的な実践に向けた申し合わせを行い、動き出した。前年度までの ESD 研究で取り組んだ校内研究授業（詳細は p 12～）の形式を今年度バージョンに手を加えて利用し、どのような伝統文化に関する授業の中で、どのような資質・能力の育成をねらうのかを示せるものとした（p 11 図 3）。試みとして 5 月、6 月に行う校内研究授業について、そのねらいなどについて確認をし、各教科等の実践について検討する機会を設定した。

6 月に研究授業をともなって行われた校内研究会では、授業を全校教員が参観し、全体での授業整理会を設け、本校の伝統文化教育の方向性や連携の可能性などについて検討した。4 月より指導を受けている国立教育政策研究所の藤野敦調査官にも参加をいただき、これまでの本校の取り組みや本日の授業、今後の実践について講演会の形でレクチャーを受けた。また、本年度より研究に関する協力をより深めたいと考えている金沢大学教職大学院の教職員、院生にも参加をいただき、研究についての説明を行い、本日の実践やこれまでの研究に関する意見の交換の場となった。

その後、月に一回程度の校内研究会を設定し、実践の進捗状況や研究の方向性などについて、共有をし、各教科等との連携の可能性についてさらなる検討を行った。

例年 11 月に開催されている教育研究発表会では、学校保健を含む全ての教科で研究授業を行った。これまでの研究の状況を発信すると同時に、今後の研究や実践の在り方について、国内外の参会者と意見を交換する場となった。

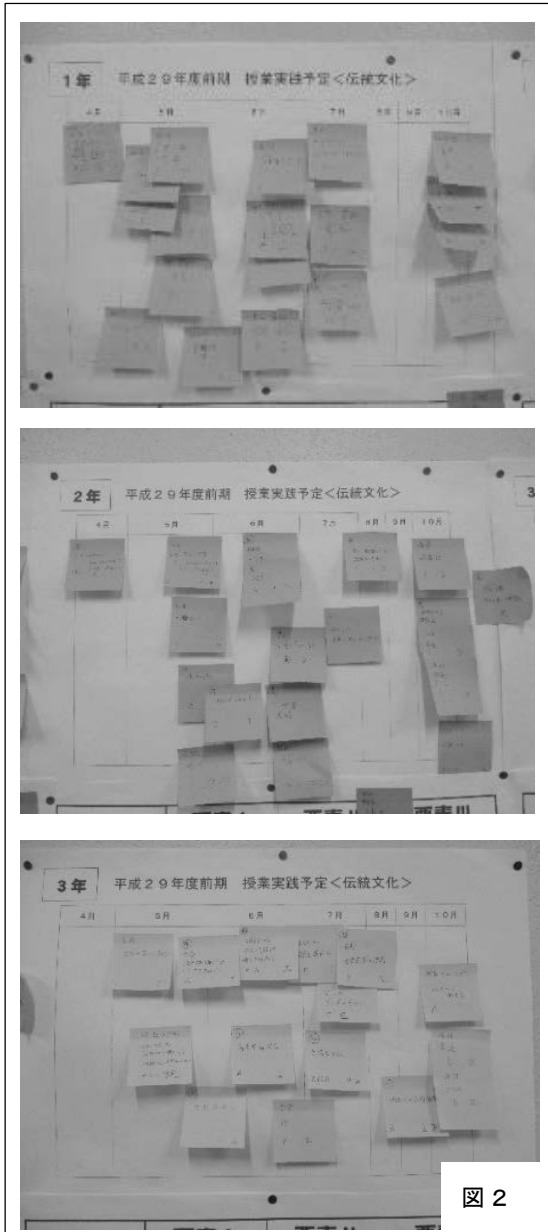


図 2

各学年での伝統文化に関わる実践を月ごとにまとめた表

プチ研 記録用紙

授業者 橋本 正恵	授業日 5 月 日 () 3 限～ 6 限
観望/観望者	関係・連携の考えられる教科等 1 年 1～4 組 社会(地理) 英語
扱う伝統文化 ・生活文化 ・伝統文化 ・地域文化	授業内容 ・「6つの食事の役割」のなかの「食文化の伝承」について理解する。 ・自分の生活を振り返り、これからの生活の工夫につなげる ・現代の日本文化・日本食の配膳の仕方について学ぶ。
特に関わる要素Ⅰ～Ⅲ 要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力 要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神 協働性・柔軟性、責任感・使命感 要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ	教科等で身に付けたい力(本時について) B (1)ア 「食事の役割」 ・食事の役割について理解する。 ・自分の食生活に興味を持ち、よりよい食習慣について考え、日常生活で実践しようとする
授業のポイント・流れ(見て欲しい部分、要素Ⅰ～Ⅲに關わるポイントなど) 前時までに食事の主な役割として以下の6つを確認しておく。 「生命や健康の維持」「エネルギー」「成長」 「生活のリズム」「人と人とのつながり」「食文化の伝承」 この中から、「人と人とのつながり」「食文化の伝承」を取り上げて扱う。 ともに食事をする事で、コミュニケーションがうまれる。同時に食文化の伝承ができる。 「インド」「ドイツ」「ニュージーランド」の食生活の場面を写真(「地球の食卓」より) ・三大食作法の割合グラフを提示し、日本の食生活との相違点について話し合う。要素Ⅲ ・和食の配膳の仕方について確認する。	
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> </div> <div style="text-align: center;"> </div> </div> <p>食生活チェックリストを使い、自分の食生活について振り返る。 今後大切にしたい食文化の作法について、考えをまとめる。</p>	

図 3

育成をねらう資質・能力や教科のねらいを示した実践の記録形式

②平成 29 年度 12 月～3 月

11 月までの時期は、伝統文化教育に関わる実践を、数多く重ねることを目標としてきた。それらの実践を受け、29 年度後半は、それらの実践が伝統文化教育として、ふさわしいものであったかや、どのような資質・能力の育成を期待できたのか、などについて考察と検討を行った。次年度へ向けて、実践の精選を行い、教科等間の連携を深めることを目標とした。

○研究授業

前述の校内研究会と共に、様々な形態での研究授業をもった。各学年で行った研究授業では、関係する教員が参観し、以降の連携へとつなげる機会となった。また、全校の職員が会し、行われた研究授業では、学校全体を通じて育成をねらう資質・能力について、設定した内容や育成のねらい方などについて検討をする機会となった。

このような研究授業においては、国立教育政策研究所の調査官を招いて指導を受けたり、金沢大学教職大学院の教員・院生の協力を得たりして、研究を多方面から捉える機会としている。

・授業実践

前述の通り、E S D 研究の取組の中では、伝統文化教育に関する研究にも共通する「全教科等で取り組む」「教科等横断的な実践を開発する」などの目的を持ち、カリキュラムマネジメントを行った。三年間をE S D 研究の成果として、全教科等の指導計画を一枚表の形にした「カリキュラムマップ」があげられる。これらの開発のベースになったのが「プチ研」と校内で呼ばれている研究授業である。

「プチ研」は、各教職員が実践を行う際に、簡易な指導案（p 11 図 3）を作成して全教職員で共有し参観し合う趣旨から行われた。普段の授業について、様々な見方から意見を集めたい時や、他教科等との連携のヒントにしてほしい時などに、「気軽に行える小さな研究授業」という意味合いで「プチ研」と名付けて継承されてきた。伝統文化教育に当たってもこれらの取り組みを重ねて、試行錯誤を重ねながら大きな研究へとつなげていきたいと考えている。

（2）成果と課題

①成果

- ・日本の伝統文化について、生徒の意識や現状などについて明らかになった。
- ・全ての教科等で伝統文化に関わった授業実践を持つことができた。
- ・各教科等のねらいを達成するために、どのような伝統文化に関わる実践が効果的であるのかを検討することができた。
- ・伝統文化を柱として、教科が連携して取り組むことのできる単元・題材を検討することができた。

②課題

- ・生徒や保護者と学習の目標を共有したり、生徒自身がその成果を評価したりする仕組みができていなかった。

- ・ 伝統文化教育を通して育まれる資質・能力の変容を明らかにするための、多様な評価について検討できなかった。

平成 29 年度の研究では、伝統文化教育に取り組む初年度として、第一の目標として、実践の数を多く持つことを掲げた。その結果、学校保健を含む全ての教科等で全ての教員による伝統文化に関わる授業実践を持つことができた。またそれらの実践は、複数教科等で連携が図られたものであり、今後、その成果を三年間の学習計画として形にしていく計画である。

また 5 月と 12 月に実施したアンケートによって、伝統文化に関する生徒の意識や実態を明らかにできた。一方、伝統文化教育によって生徒にどのような資質・能力の変容が見られたかということに関しては、明らかにできなかった。今後、アンケートの内容を始め、多様な評価の在り方についての検討が重要であることがわかった。

研究を進める中で、教育目標や研究活動を、その他の教育活動を俯瞰できるグランドデザインが必要なのではないかという議論が起きた。平成 29 年度は、年度の途中ではあったが、グランドデザインの作成に着手した。平成 30 年度は、この表をもとにして、学校教育の教育活動に関わる生徒・保護者・地域・教職員が目標を共有して日々の活動に臨みたいと考えた。

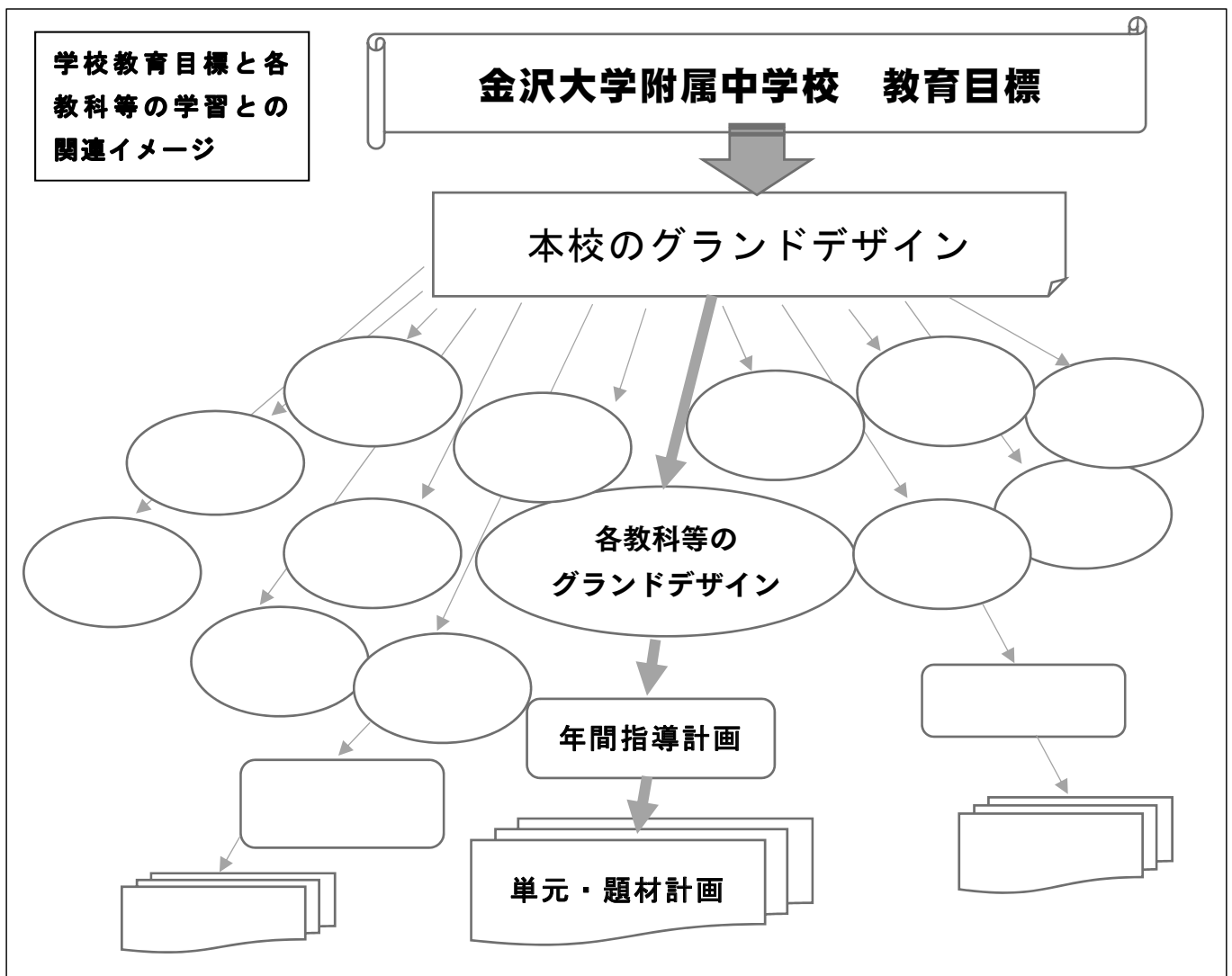
4. 平成 30 年度（2 年次）の取組

前年度の成果と課題を踏まえて、平成 30 年度は新たに以下の点を意識して研究に取り組むこととした。

- ・生徒や保護者と学習の目標や学びの過程を共有できる方策をつくる。
- ・伝統文化教育を通して育まれる資質・能力について、その内容についてより明らかにする。

(1) 学校全体のグランドデザインを基にした各教科等の指導の工夫

前述のように、学校全体のグランドデザインを作成した（p 31～32）。学校の教育目標を達成するために、学校の全ての活動がどのようにに関わり、連携して目標を達成するのかを図示したものである。このグランドデザインを拠り所として、今年度は、各教科等がそれぞれの目標を設定し、学習指導の計画を作成し、そこに伝統文化教育も位置付けた。（p 33～46）。



また、これまでの学習指導案の形式にも大きく変更を加え、各授業の学校全体の教育活動上での位置付けを明確にし、後述（p 16）の学校全体として育成する資質・能力①～③と各授業との関連を示すものとした。各教科等の学習の中で、どのような資質・能力の育成をねらっているのかを明記し、学校全体として、どのように資質・能力を育成していくのかについて、イメージが持てる形式とした。実際に作成された学習指導案（p15）を例として詳細についての

説明を加える。

これまでは、本時の学習に重きを置きがちであった学習指導案形式に工夫を加えた。図で示したように、「学校全体で育成する資質・能力」「教科の年間指導計画」「単元の指導計画」の位置付けが明確になるような形式とした。教科の学習は、単なる知識や技能の寄せ集めではなく、スパイラルに積み上がっていく中で、様々な資質・能力の育成につながるものである。そのことを、各学習を計画する際に明確にすることを意識している。

4. 単元計画 (3時間扱い、本時 は3時間目)

次時	○学習内容(ねらい)・学習活動	指導上の留意点・他教科等との連携	評価規準	育成する資質・能力
1	<ul style="list-style-type: none"> ○俳句の特色などを知るとともに、そこに込められた心情や情景を読み味わう。 ・ 詠まれている情景を想像しながら、それぞれの俳句を音読する。 ・ 俳句に関する専門用語の意味を確認する。 ・ 筆者のものの見方や感じ方が表れている語句や表現などの意味を確認する。 ・ 解説を基に、俳句の表現の工夫とその効果について確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○他教科と連携しているところに、教科名と内容が書かれています。 ・ 既習事項を確認するために俳句について知っていることや小学校で学んだことのある作品などを発表する。 ・ 俳句を作るときに心構えについて、筆者が述べていることを確認する。 ・ 目的意識を持つために第3時に句会を行うことを促える。 <p>【3年英語】：英語で俳句を作ろう</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○この特には、教科の評価が記入されています。 ・ 各俳句の季節や季節を押しえ、五句に合わせた情景や心情を捉えることができる。【読むこと】 	<ul style="list-style-type: none"> ①日本の伝統や文化に関する理解 ②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度 ③文化の伝承・創造への主体性など <p>という育成したい資質・能力の三つがどこで養われるか、教科としてどのようなことができるようになるかと捉えているか書かれています。すべての枠に入るわけはありません。</p>
2	<ul style="list-style-type: none"> ○「俳句を味わう」の句を音読し、それぞれの心情や情景を読み味わう。 ・ 俳句の大意を理解する。 ・ 季節や情景、作者の感動が表れた言葉を探る。 ・ 最も気に入った俳句一つを選び、心ひかれた言葉や表現についてコメントを書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○教科名と内容が簡単に書いてあります。 ・ 言葉に着目しながら俳句の大意、情景や心情を捉えるためにワークシートを用いる。 ・ コメントで取り上げる言葉や表現は、一つに絞ることと季節や切れ字などに着目することを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 作品の具体的な言葉や表現に即してコメントを書くことができる。【書くこと】 	
3	<ul style="list-style-type: none"> ○表現のしかたを工夫して俳句を作り、友達と感想を交流する。 ・ 俳句を作るときに観点を確認する。シートを使って俳句を作る。 <p>二重線で囲まれているところが単元計画の中に位置づけられた本時となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 作った作品を交流する。 ・ 各自、よいと思った一句を選び、そのよさを語で伝える。 ・ 各班から選ばれた一句を全体で紹介する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「歳時記」や国語辞書を活用し、参考にする。 ・ セントとなるように印象に残った出来事を自由に出し合うことを確認する。 ・ 語句を吟味し、定型になるようにする。 ・ 各班で出た意見を基に発表するようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 感動の中心が伝わるよう、語句や語順、表現のしかたを工夫して俳句を作ることができる。【書くこと】 ・ 選んだ俳句のよさについて、そのよさを説明することができる。【話すこと・聞くこと】 	<ul style="list-style-type: none"> 【③文化の伝承・創造への主体性など】 <p>表現を工夫して、日常生活の中での発見や感動を俳句にする。</p> <p>教科として資質・能力に関わる場所について書いています。</p>

平成30年度に新たに示した単元計画の形式

p15の単元計画は、平成30年11月に行われた三年生理科の天体の学習に関するものである。p16で挙げた複数の教科が連携して考えられた実践に関する内容である。二重四角で囲まれた一時間目の部分が「本時」を示し、p16の実践事例に当たる部分である。縦の列ごとの内容としては、四列あるうちの左端の列は、教科としての学習内容と活動、そしてそのねらいが示されている。その右隣りが指導上の留意点と他教科等との連携について、示している。その隣の列が教科としての評価規準を示している。伝統文化に関わった学習を計画するに際しても、教科等が目指すねらいを最優先にしつつ、実践に当たることを明確にしている。右端の列は、学校全体として育成する資質・能力＝グローバル社会に生きるために必要な資質・能力(p17)について、この学習で、どの部分の育成をねらうのかについて示している。例に挙げた計画では、1時間目に当たる部分のみに記載があるが、これは単元全体を通じて、前述の資質・能力の育成をねらう学習が冒頭の時間のみであることを示している。この資質・能力の育成に関しては、教科や単元・題材の内容によって、その扱いに違いがある。どのように分担・連携をしていけば、より効果的な資質・能力の育成につながるのかについての検討が必要である。

4. 単元計画（4時間扱い、本時 は1時間目）

次 時	○学習内容（ねらい） ・ 学習活動	指導上の留意点 ・ 他教科等との連携	評価規準	育成する資質 ・ 能力
一	<ul style="list-style-type: none"> ○月の満ち欠けの規則性を知り、いくつかの情報から、今日の月の形や和歌に詠まれていた月の形を予測する。 ・各班で模型を用い、天体の位置関係の変化と、月の満ち欠けの規則性について観察を行う。 ・学習した内容を基に、今日の月はどのような月なのかを予測する。 ・百人一首に出てくる月はどのような月なのかを予測する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭分野で学習した内容を振り返り、日本人が昔から自然との関わりを大切にしてきたことを思い出させる。 ・2年時に国語の授業で生徒が詠んだ歌を例に挙げ、興味を喚起する。 (3年家庭)：住まいの工夫 (3年国語)：いにしえの心と語らう 	<ul style="list-style-type: none"> ・地球から見える月の形や位置の変化を、月の公転と関連付けて捉えることができる。 【科学的な思考・表現】 	<p>【①日本の伝統や文化に関する理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昔から日本人は月の満ち欠けや、様々な時間帯に見られる月に着目し、そこに心情を重ね合わせていたことを知る。
2	<ul style="list-style-type: none"> ○太陽・月・地球の位置関係の変化によって、日食や月食などの天体現象が起こることを理解する。 ・映像やモデルを用い、天体の位置関係の変化によって日食や月食が起こることを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の授業で学習した月の満ち欠けの規則性について思い出させ、天体の位置関係の変化によって起こることを確認する。 ・日本書紀など、日本の昔の書物にも日食に関する記述があることを紹介し、興味を喚起する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日食・月食の現象を理解し、太陽・月・地球の位置関係によって起こることを理解する。 【自然現象への知識・理解】 	
二 1	<ul style="list-style-type: none"> ○地球から見た金星は、どのような動きをするのかを知り、その原因を考える。 ・太陽と地球、その他の惑星の位置関係について確認する。 ・地球とその他の惑星の位置関係から、金星がなぜ複雑な動きをして見えるのかを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・明けの明星や宵の明星という言葉を知っている生徒がいれば、その言葉の意味について触れることで興味を喚起する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・金星が星座の星の間を動いて見える原因について、地球と金星の位置関係と関連付けて捉えることができる。 【科学的な思考・表現】 	
2	<ul style="list-style-type: none"> ○地球から見た金星は、どのような見え方をするのかを知り、その原因を考える。 ・模型を用い、太陽と地球、金星の位置関係を変えたときの金星の見え方について観察を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の学習内容を思い出させ、太陽と地球、その他の惑星の位置関係について確認する。 ・模型を用いた観察の際には、地球からの視点で観察するように伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・金星の見え方の変化を、太陽・金星・地球の位置関係の変化と関連付けて捉えることができる。 【科学的な思考・表現】 	

(2) 学校全体で育成する資質・能力の設定

平成 29 年度には、学校全体で育成を目指す資質・能力として、先述（p6）の通り、グローバル人材の要素 i～iii を設定した。

※「グローバル人材」…要素 i：語学力・コミュニケーション能力

要素 ii：主体性・積極性，チャレンジ精神，
協調性・柔軟性，責任感・使命感

要素 iii：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー
(グローバル人材育成推進会議)

これらの資質・能力の育成をねらって、各教科等の指導を計画したところ、以下の二点の問題点が明らかになった。

- ・各要素の定義が具体的ではなく、学校教育に特化した設定ではないため、各教科等の学習目標や学習内容との関連を示すことに困難があった。
- ・どの要素も、一時間ごとの学習で育成をねらうことは難しく、単元（題材）や他教科等との連携、3年間を通した学習計画などの中で育成ねらわなければならないものである。

これらの問題点を踏まえ、平成 30 年度には、学校全体を通して育成したい資質・能力として、それまでの要素 i～iii をもとに、再度、育成を目指す資質・能力の設定をした。

学校全体として育成する資質・能力＝グローバル社会に生きるために必要な資質・能力

- ①日本の伝統や文化に関する理解
- ②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度
- ③文化の伝承・創造への主体性など

これらを設定するために、グローバル社会で生きるために、中学生に必要とされていることはどのようなことなのか、という点に立ち戻り、育成をねらう資質・能力について検討を行った。「学習指導要領総則解説」では、グローバル社会に生きるために必要な資質・能力に関連して、以下のように説明している。

将来の我が国を担う中学生は、郷土や国で育まれてきた優れた伝統と文化などのよさについて理解を深め、それらを育んできた我が国や郷土を愛するとともに、国際的視野に立って、他国の生活習慣や文化を尊重する態度を養うことが大切である。また、国際社会の中で独自性をもちながら国際社会の平和と発展、地球環境の保全に貢献できる国家の発展に努める日本人として、主体的に生きようとする態度を身に付けていくことが求められる。

将来、グローバル化した社会の中で生きるためには、伝統や文化に関する理解、自他の文化を尊重する態度、主体的に生きる態度などが必要であるとされている。これらのことを踏まえて、本校が学校全体を通じて育成をしたい資質・能力について検討をしたところ、以下の三つに整理することができた。

①日本の伝統や文化に関する理解

前年度までの「要素 iii：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」を踏まえたものである。グローバル社会に生きるためには、まず一人一人がその立脚する文化を理解することが必要である。日本の伝統や文化のよさについての理解に基づいて、他国の伝統や文化を尊重する態度へとつなげていくことが求められる。

②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度

「要素 i：語学力・コミュニケーション能力」を踏まえて設定をした。「①日本の伝統や文化に関する理解」を基盤とし、自国の文化を発信したり、異文化との比較をしたりする上で、コミュニケーションは不可欠である。異なる文化を持った様々な人とのコミュニケーションを通して、互いの文化を尊重する態度を育むことができると考えられる。

③文化の伝承・創造への主体性など

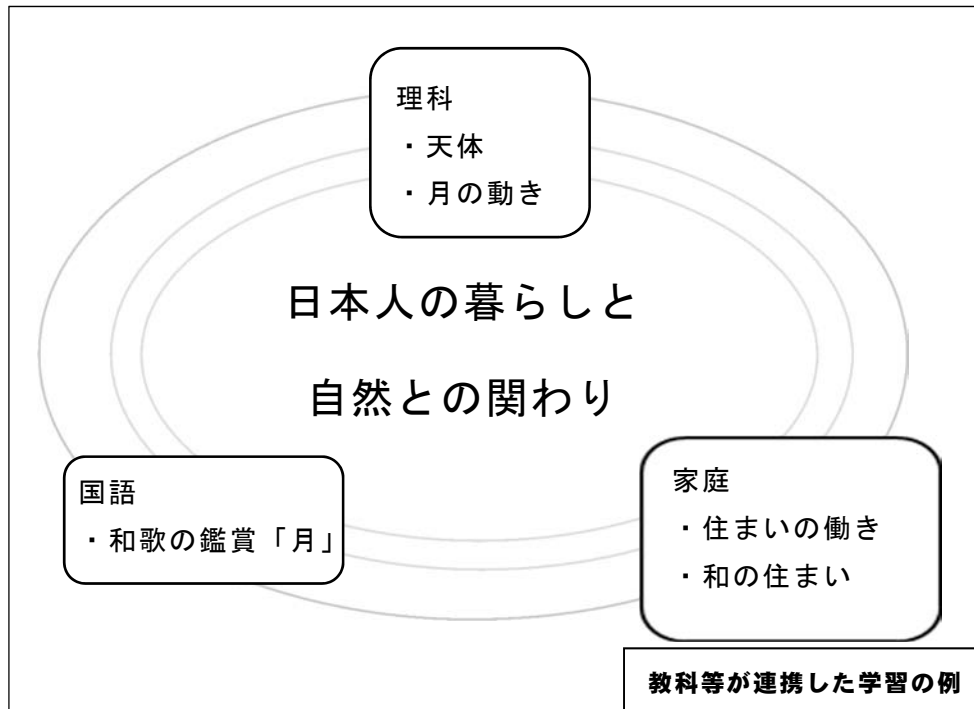
「要素 ii：主体性・積極性，チャレンジ精神，協調性・柔軟性，責任感・使命感」を踏まえて、設定をした。国際社会の中で独自性をもちながら国際社会の平和と発展，地球環境の保全に貢献できる国家の発展に努める日本人として、主体的に生きようとする態度を身に付けることが目標である。様々な文化を持つ人々と協働しながら、さらに新しい価値観や文化を創造するための主体性を育みたいと考えている。

これら三つの資質・能力は、単独の授業や教科等で育むことのできる性質のものではなく、学校全体の教育活動を通して、三年間を通じて育成していくものである。また、各教科等の学習内容と、これらの資質・能力の関り方には、それぞれ違いがあることも想定される。今年度の取組の一つとしては、各教科等の学習とこれらの資質・能力の育成にどのような関連性があるのかを明らかにすることを目指したい。そのためにも、先述（p 15）の学習指導案の工夫において、単元（題材）指導計画の中で資質・能力の育成がどのように位置づけられているのかを明確にすることが、重要であると考えている。

学校全体で資質・能力を育成するために、前年度に引き続き、各教科等が相互に連携をして学習を構築することを進めている。実践記録にあるものはもとより、普段の学習から、連携を意識して、授業の計画に臨んでいる。

例えば、三年生の国語，理科，技術・家庭科（家庭分野）では、「日本人の暮らしと自然との関り」について、連携して学習に取り入れた。それぞれの教科で、教科としての学習のねらいを明確にしながら、相互に連携することを計画した。このような取組を重ねることにより、学校全体で育成をする資質・能力について、育成を期待できることはもちろん、各教科の学習のねらいの達成により迫れるのではないかと考えている。国語では国語の、理科では理科の、技術・家庭科では技術・家庭科のそれぞれの学習のねらいを明確にした上で、その達成のために用いるべき適切な題材を検討したときに、「日本人の暮らしと自然との関わり」という題材で実践を行うこととなった。時期的には、始めに技術・家庭科（家庭分野）の住まいに関する学習で、日本での伝統的な住まいの特徴について学び、身近な和室と洋室のそれぞれの長所と短所について考える学習を持った。その中で生徒は、幼児や高齢者にとって過ごしやすい環境について理解をしたり、日本人が昔から、暮らしの中に自然を取り入れて生活を楽しんできたことを理解したりした。その上で、月見や花見など、季節ごとに暮らしの設えに工夫を凝らしてきたことが、現代の日本の生活の中にも生きており、自分たちの生活にそれらの工夫を取り

入れていきたいという姿勢につながった。このような学習を生かして、国語と理科が並行して、学習を進めた。理科では、天体の学習の中の「月」の動きや見え方に関する学習で、技術・家庭科での学習を踏まえ、日本人が住まいの中から月を見ていたという状況の理解を生かした学習を設定した。国語では、「月」を読んだ短歌の鑑賞に関する学習を設定し、当時の人々が見ていた月はどのような月なのかということについて考えながら短歌の理解を試みるなど、技術・家庭科と理科での学習を踏まえた学習となった。



三つの教科が連携して学習を設定したことにより、それぞれの教科の学習に関して、より興味・関心が高まり、理解も深まった。各教科の成果と課題の記述にその成果が見られる。

また、各教科が連携する中心となる題材に伝統文化に関する事柄を置いたことにより、学校全体で育成する資質・能力の変容も見られた。学習後の生徒の記述によるアンケートから、その内容を見ることができた。

(3) 成果と課題

①成果

○学校全体として、伝統文化教育を通して育成したい資質・能力について設定をし、各教科等で実践を重ねることができた。

平成 29～30 年度の期間で、伝統文化に関わって、資質・能力の育成を目指す授業をのべ 80 時間以上の実践を持つことができた。

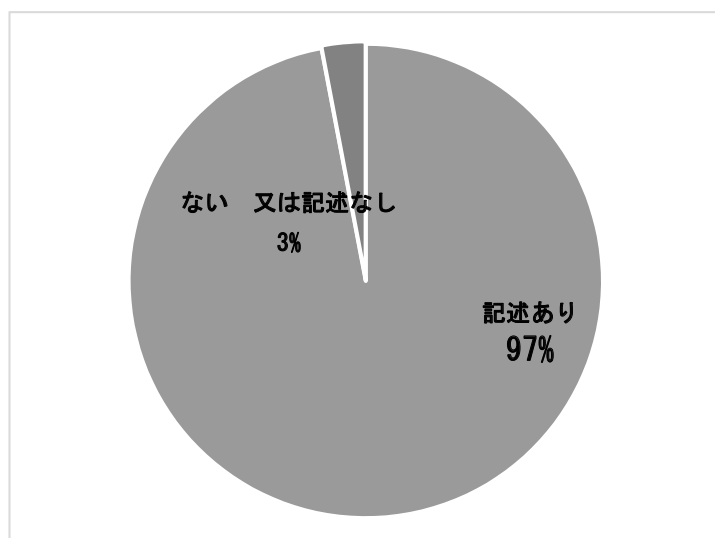
○伝統文化を柱として、教科等が連携して取り組むことのできる単元・題材を開発した。

先に挙げた実践のうちのほとんどが、他の教科等との連携を図ったものであった。

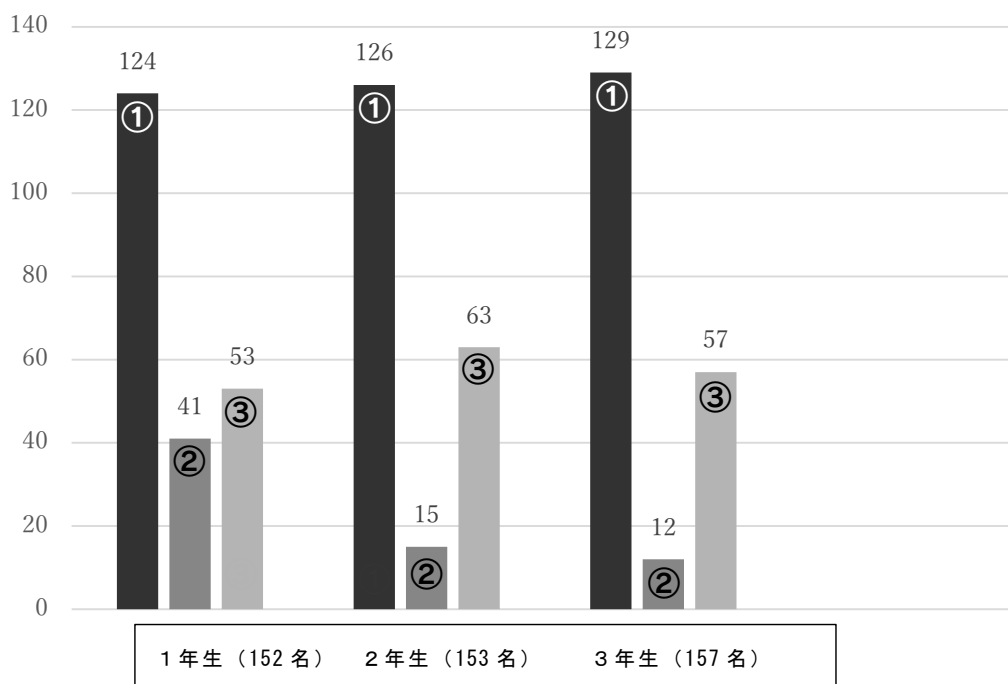
○開発したカリキュラムの実践において、生徒の資質・能力の育成につながる成果が見られた。

生徒の資質・能力の変容を見取るために、平成 31 年 1 月に、全校生徒 448 名を対象にアンケートを行った。伝統文化教育を通して、ほとんどの生徒に資質・能力の変容が見られた。

伝統文化に関する学習を行ったことで、どのような変化がありましたか。



記述にある、資質・能力①①～③③に関する内容ののべ数



- ①日本の伝統や文化に関する理解
- ②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度
- ③文化の伝承・創造への主体性など

記述例

日本に住んで14年間も経たのに、まだまた日本文化について知らないことがたくさんあることが分かった。
①
日常生活で、日本ならではの文化に出会ったとき、他の国では
どうなのかを自然と考えるようになった。②

これまであまり伝統文化について興味をなめなかったけれど、興味をもつようになった。外国の伝統について気になった。伝統文化がなくならないようにしっかりと残しておきたいなと考えるようになった。
③

② 課題

- 資質・能力の変容を、多様な視点から明らかにする評価方法についての検討には、至らなかった。

学校全体で育成する資質・能力について、具体的に設定をすることができた。来年度以降は、グランドデザインや各教科等の年間指導計画の改善を踏まえて、その変容を見取る方法について検討をしたい。上記のアンケート結果では、資質・能力①～③の記述に差がある。このことが、実際にどのようなことを意味するのかについて、今後、生徒へのフィードバックを含めて、再検討をしたい。

5. 令和元年度の取組

これまでの二年間の取組について振り返ると、一年次には伝統文化教育に関する実践を数多く積み上げ、二年次には、それらの実践が適切か否かを検討しつつ、新しい実践を積み上げた。三年次にあたる令和元年度は、二年間の実践を精選する段階とした。

	各教科等の授業実践	学校全体の カリキュラムマネジメント
平成 29 年度 (1 年次)	<ul style="list-style-type: none"> ・伝統文化に関わる授業実践を数多く積み上げる。 ・伝統文化教育と教科等のそれぞれのねらいについて、関連を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教科等間のつながりや連携を模索する。 ・学校全体で育成をねらう資質・能力について検討する。
平成 30 年度 (2 年次)	<ul style="list-style-type: none"> ・資質・能力①～③の育成にふさわしい実践について試行錯誤する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資質・能力①～③の育成に効果的な教科等の連携を模索し、三年間の学習計画を一覧にする。
令和元年度 (3 年次)	<ul style="list-style-type: none"> ・各教科で、伝統文化教育に関わって、日本全国の学校で活用が可能な実践の事例を確定する。 ・各教科等の学習と伝統文化教育との関連を明らかにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・伝統文化教育に関する三年間の学習計画表を完成する。

(1) 各教科等の授業実践

平成 29・30 年度の二年間で積み上げた授業実践を、教科のねらいや学校全体で育成する資質・能力①～③の観点で検討をすすめている。教科のねらいと、資質・能力①～③を育成することの両方を達成できる、よりよい実践を目指し、日本全国の学校でも活用できる実践事例の完成に向けて、試行錯誤を繰り返している。以下、今年度の授業実践の作成とその検討について、具体的に説明を加える。

校内での研究授業などを通して、各々の教科等の実践を共有し、その改善に向けて、意見交換をしている。授業者はあらかじめ、育成をねらう資質・能力を設定し、学習を経て達成したい姿を具体的に示し、学習を通してねらった資質・能力の育成が達成できたのか否かを見取り、授業の改善に生かしている。また、それらの授業実践を学校全体で共有することで、教科等間の連携に生かすことができる。

今年度行われた三年生音楽の学習を例として、授業検討の説明とする。P23～24 は、令和元年 10 月に行われた三年生音楽の単元計画案・学習指導案である。歌唱の学習を通して、「資質・能力③文化の伝承・創造への主体性など」を育成することをねらっている。授業者はあらかじめ、本時の学習を通して、「資質・能力③文化の伝承・創造への主体性など」が育った生徒の姿として、例えば、ワークシートの記を具体的に想定するなどして、などの具体的なものを想定し、授業を組み立てた。授業の参観者は、学習を通して生徒がどのような変容したのかを、資質・能力①～③に着目して、見取る取り組みをした。p28 に校内での授業検討に関する各教員の記述をまとめた。

3年3組 音楽科 学習指導案

令和元年10月18日(金)
6時間目 音楽室
指導者 鏡千佳子

1. 題材名 「心の歌」を歌い継ごう

(教材名) 「花の街」江相摩子/作詞 團伊玖磨/作曲
「花」武部羽衣/作詞 滝廉太郎/作曲

2. 題材 「心の歌」を歌い継ごう」について

本題材での「心の歌」とは、教科書に載っている共通教材のことを指している。2. 3年下(教育芸術社)に掲載されている「花」「花の街」はそれぞれにつくられた背景がある。戦後、平和への思いを乗せた「花の街」や、戦国後、西洋の音楽の様式で日本初となる合唱曲となった滝廉太郎の「花」は、当時の社会的・歴史的背景とも大きく関わっている。ただ情景を想像して歌う、強弱に注意して歌う、という学習に留まらず、背景を関わらせながら、どのように歌いたいか、なぜこうした曲が教科書に掲載され、中学生が歌い学ぶこととされているのかについても考え、これまで歌い継がれてきた貴重な日本の歌曲を、さらに未来へ繋いでいこうとする意識を高めたいと考えた。

3. 生徒の学びの過程

3年生はこれまで、1年時に民謡、2年時には歌舞伎、3年時には能、そして3年間通して箏の演奏や創作を通して日本の音楽を学んできた。本校の生徒は新たな発見や知識を得ることに大変興味があり、普段の生活の中ではあまり耳にする機会のない音楽でも、どれも興味をもって取り組む姿が見られた。新たな知識を得ることでこれまでの学習とのつながりが感じられ、学ぶことの楽しさにつながっているように思う。しかし「心の歌」に対しては、ただ「キレイな歌」「優しい感じがする歌」というような印象に留まっている。「なんとなく聴いたことがある」「日本人として1曲くらいは歌えたらいい」「別に知らなくてもいい」というような思いを持つ生徒が少なくない。事前アンケートでは、「心の歌」を学校で学ぶ必要がある・どちらかといえば必要と答えた生徒は86.8%で、どちらかといえば必要ない・必要ないと答えた生徒は13.2%であった。比較的多くの生徒が学ぶ必要性を感じているが、義務教育最終年度となる本年、「心の歌」のつくられた背景を学び、先人たちの思いを知ること、「心の歌」をより豊かに歌いたいと思える生徒を育てたい。また、なぜ教科書に載っているのか、なぜ中学校でこのような歌を歌うのか、についても思慮深く考える機会とし、「心の歌」を歌い継ぐ心を育みたい。

4. 学習指導要領との関連

- ア 歌唱表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲にふさわしい歌唱表現を創意工夫する。
- イ(ア) 曲想と音楽の構造や歌詞の内容及び曲の背景との関わりを理解する。
- ウ(ア) 創意工夫を生かした表現で歌うために必要な発声、言葉の発音、身体の使い方などの技能を身に付ける。

〔共通事項〕本題材において主に扱う音楽を形づくっている要素…音色、旋律

6. 本時の展開

学年	3年	関係・連携の考えられる教科等 社会・国語
授業内容	<p>曲に込められた思いを汲み取り、ふさわしい歌唱表現を考える。</p> <p>教科等で身に付けた力(本時について)</p> <p>育成したい資質・能力</p> <p>③文化の伝承・創造への主体性など</p> <p>音色、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、歌詞の内容や曲想を味わって曲にふさわしい音楽表現を工夫し、どのように歌うかについて思いや意図を持つ。【音楽表現の創意工夫】</p> <p>《新学習指導要領との関連》</p> <p>ア 歌唱表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲にふさわしい歌唱表現を創意工夫する。</p> <p>イ(ア) 曲想と音楽の構造や歌詞の内容及び曲の背景との関わりを理解する。</p> <p>授業のポイント・流れ</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「花」「花の街」を歌う。 <ul style="list-style-type: none"> ・前時を思い出し、難しい旋律やリズムに注意して歌う。 2. 曲に込められた思いを汲み取る。 <ul style="list-style-type: none"> ・前時のアンケートから様々な考えを紹介し、なぜ「心の歌」を歌うのかに迫る。 ・「花」の歌詞を読む。 ・リズムの違う「花」を聴き、春の美しい情景だけでなく、ワクワクした気持ちがリズムで表されていることをつかむ。 ・特徴的なリズムを感じながら歌う。 ・「花の街」の歌詞を読む。 ・前奏や歌の旋律からどんな印象を受けるか考える。 ・「花の街」のつくられた背景を知る。 ・「花の街」に決められた思いは何か、なぜ教科書に載っているのかについて考える。 3. これまでに学んだことを生かし、「花の街」をどのように歌いたいか考え、歌う。 	

5. 題材計画（3時間扱い、本時 は 2時間目）

次時	○学習内容（ねらい）・学習活動	指導上の留意点・他教科等との連携	評価規準	育成する資質・能力
1	<ul style="list-style-type: none"> 小学校からの既習の共通教材を数曲歌う。 ○「花」「花の街」を歌う。 ・「花」の軽快なリズムや「花の街」の旋律の流れの美しさを感じて歌う。 ・作詞者、作曲者について学ぶ。 ・それぞれの曲の特徴をつかみ、歌う。 	<ul style="list-style-type: none"> 学年ごとに1曲ずつ選び、スライドに歌詞を映す。 ・なぜ学校で「心の歌」を歌うのか、なぜ教科書に載っているのかという質問を投げかけ考えながら歌う学習をすることを伝える。 ・前奏だけを弾き、どのような感じの曲か、これからのような歌詞が出てくるか想像するような流れにする。 ・「花の街」と「花」を比較し、旋律の流れの美しさやリズムの軽快さといった特徴をつかんで歌うようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「心の歌」の歌詞の内容や曲想に関心をもち、曲にふさわしい音楽表現を工夫して歌う学習に主体的に取り組もうとしている。 【音楽への関心・意欲・態度】 《新学習指導要領との関連》 ア 歌唱表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲にふさわしい歌唱表現を創意工夫する。 	育成する資質・能力
2	<ul style="list-style-type: none"> ○曲に込められた思いを汲み取る。 ・「花」の歌詞を読む。 ・リズムの違い「花」を聴き、ワクワクした気持ちやリズムで表されていることをつかむ。 ・特徴的なリズムを感じながら歌う。 ・「花の街」の歌詞を読む。 ・前奏や歌の旋律からどんな印象を受けるか考える。 ・「花の街」のつくられた背景を知る。 ・「花の街」に込められた思いは何か、なぜ教科書に載っているのかについて考える。 ・これまでに学んだことを生かし、「花の街」をどのように歌いたいのか考え、歌う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時のアンケートの内容から、なぜ教科書に載っているのだろうということから、課題に迫る。 ・総書きの歌詞をスクリーンに映し、情景の美しさを表していることをつかませる。 ・リズムを変えて歌い、リズムに着目させる。 ・「花」は情景の美しさとワクワクした気持ちが表されていることをおさえる。 ・戦時中の日本の様子も考えながら、「花の街」がどのような思いでつくられたのかを作者の言葉と共に紹介する。 <p>[社会：3年]国語</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・音色、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、歌詞の内容や曲想を味わって曲にふさわしい音楽表現を工夫し、どのように歌うかについて思いや意図を持っている。 【音楽表現の創意工夫】 《新学習指導要領との関連》 ア 歌唱表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲にふさわしい歌唱表現を創意工夫する。 イ（ア）曲想と音楽の構造や歌詞の内容及び曲の背景との関わりを理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 【③文化の伝承・創造への主体性】 ・「花の街」を、思いを持って歌おうとしている。
3	<ul style="list-style-type: none"> ○「花の街」にふさわしい歌い方を考える。 ・自分が歌いたいように表現するには、どのように歌えばよいかを考える。 ・「花」と「花の街」の休符に着目し、休符を生かした歌い方を工夫する。 ・歌詞や背景、旋律から「花の街」にふさわしい歌い方をグループで考え、歌う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時のワークシートを配り、どのように歌いたいと思っていたか確認する。 ・「花」と「花の街」の休符の部分に手拍子を入れ歌ってみて、どのような感じがするか、休符の役割や意味について考え、歌い方の工夫につなげる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・歌詞の内容や曲想を生かした、曲にふさわしい音楽表現をするために必要な技能を身に付けて歌っている。 【音楽表現の技能】 《新学習指導要領との関連》 ア 歌唱表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲にふさわしい歌唱表現を創意工夫する。 ウ（ア）創意工夫を生かした表現で歌うために必要な発声、言葉の発音、身体の使いなどの技能を身に付ける。 	育成する資質・能力

3年生音楽 校内研究授業 参観記録

「資質・能力③文化の伝承・創造への主体性など」について、生徒にどのような変化が見られましたか。	「資質・能力③文化の伝承・創造への主体性など」の育成について、この授業はどのように携わっていましたか。	その他
<ul style="list-style-type: none"> ・時代背景を知り、歌詞を理解することで、歌唱の時の姿勢が良くなる（やわらかく）なったように感じた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・指導案から読み取れなかったが、「軍歌」を流すだけでなく、軍歌の歌詞を映すことで、より深められていた。 	<p>BGMとして、授業の際に音楽を流すことはあったが、歌詞を見せることで、より深められるということがわかった。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・曲の背景という視点が加わったことで、曲の意義や考えが浮かんでいなくなったのが、そこに込められた思いを想像できるようになっていた。 ・歌い継がれる理由や思いに言及していたのが印象に残った。最後の合唱にも、歌い方の意図を感じた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・遺されていたから価値があるのではなく、価値があるから遺された。ききたものが伝統文化であることを認識できる取り組みだった。 ・生徒の感じた思いに合わせて、リズムや曲調を変えて表現していた演奏は、気付きを促す活動だった。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・少し「工夫して歌ってみたいかな」と思ったように見えました。顔が上向きになっていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の気持ちの面で、伝承への主体性を促す授業だった。伝承・創造への主体性は、「すげえな」などの感情がもたれていると思います。 	<p>全体的に最後、歌い方がやわらかくなくなってきたように思います。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・事前のアンケートでは、「心の歌」に対し、ネガティブな意見であったが、歌詞の時代背景や思いを知った後、生徒の口から「感動する」という言葉が出た。その時代の人の気持ちに触れ、ただの古い歌ではないことに気付くことができたのだと思う。最後は、その時代に思いを込めて歌っていたように感じた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・歌詞や曲調だけでなく、歌が作られた時代背景や思いに触れたことで、伝承の必要性について主体的に考えることができていたと思う。 	<p>普段の授業では、1時間で生徒の変容を見取るとは難しいことが多いが、今回の授業では、生徒がわかりやすく変わっていった。表現をさせる点で、他の教科の授業でもアプローチの仕方を工夫したい。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・「花」がワクワクした気持ちがりズムで表現されていると自分で発言した時の「ハッ」とした感。まさに発見だったのだと思います。これが伝承につながっていくのでしょうか。 		<p>体育（ダンス）でも、同じような流れで、そのダンスの作られた背景などを踏まえ、ステップの意味などにも結び付けられたらいいなと思います。</p>

(2) 学校全体のカリキュラムマネジメント

p 47～52 の学習計画表は、全ての教科等の学習計画のうち、伝統文化教育に関わる部分を色付けし、育成をねらう資質・能力を示したものである。この表を拠り所として、学校全体として、資質・能力①～③を育成に取り組んでいる。この表を用いることで、生徒がいつ、何をどのように学ぶのかということ全体を全ての教師が共通して把握することができる。そのことを踏まえて、各教科等間の連携を計画したり、育成をねらう資質・能力について、その分担を検討したりした。

例えば、二年生の 11 月の各教科の学習を見てみると、12 の教科等のうち、8 の教科等で伝統文化教育に関わった実践が行われており、資質・能力①～③のいずれかの育成を各々の教科等が担っている。また、実際の実践として、理科・体育・家庭科が連携して学習の単元・題材を構築している。

令和元年度末には、これらの実践によって、資質・能力①～③がどのように育成されたのかを、生徒のアンケート等で分析したいと考えている。同時に、資質・能力①～③の育成のためによりよい実践の形を精選し、発信したいと考えている。

(3) 成果と課題

①成果

○学校全体として、伝統文化教育を通して育成したい資質・能力について設定をし、各教科等で実践を重ねることができた。平成 29～令和元年度の期間で、伝統文化に関わって、資質・能力の育成を目指す授業をのべ 100 時間以上の実践を持つことができた。

○伝統文化を柱として、教科等が連携して取り組むことのできる単元・題材を開発し、その精選を行うことができた。

先に挙げた実践のうちのほとんどが、他の教科等との連携を図ったものであった。

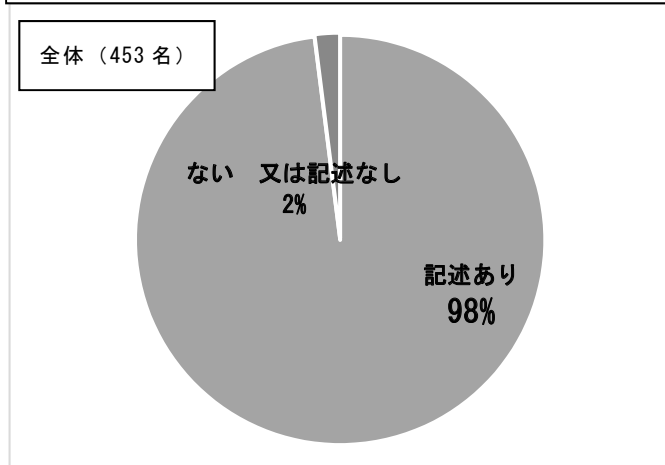
○開発したカリキュラムの実践において、生徒の資質・能力の育成につながる成果が見られた。生徒の資質・能力の変容を見取るために、令和元年 1 月に、全校生徒 446 名を対象にアンケートを行った。

○昨年度からの課題であった、資質・能力の変容を、多様な視点から明らかにする評価方法についての検討を行った。研究授業において、参観者による生徒の行動観察を行ったり、授業者と参観者が共に授業評価・分析を行ったりした。

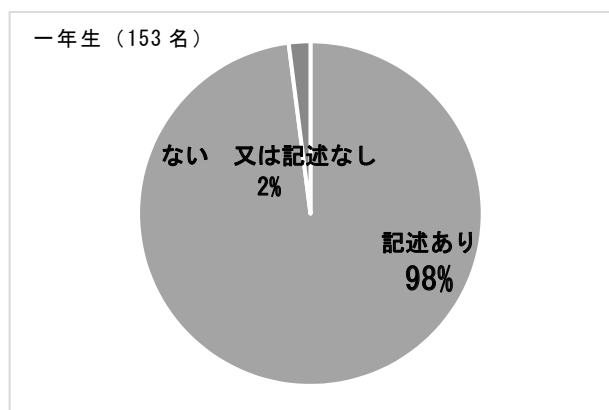
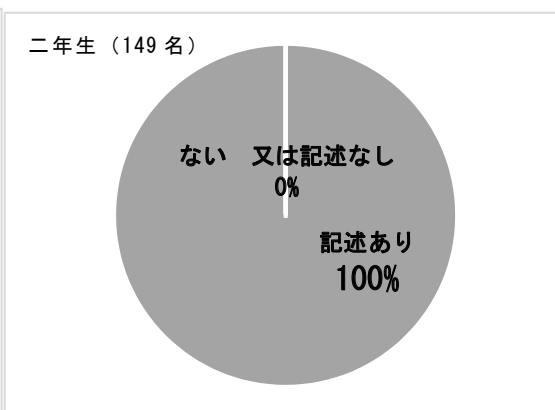
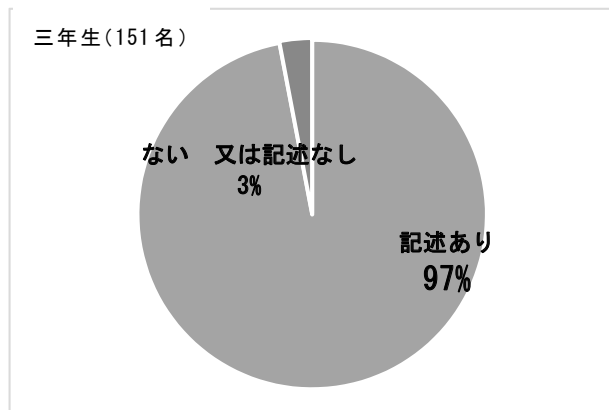
令和二年1月に、全校生徒にアンケートを行った。

記入の有無について

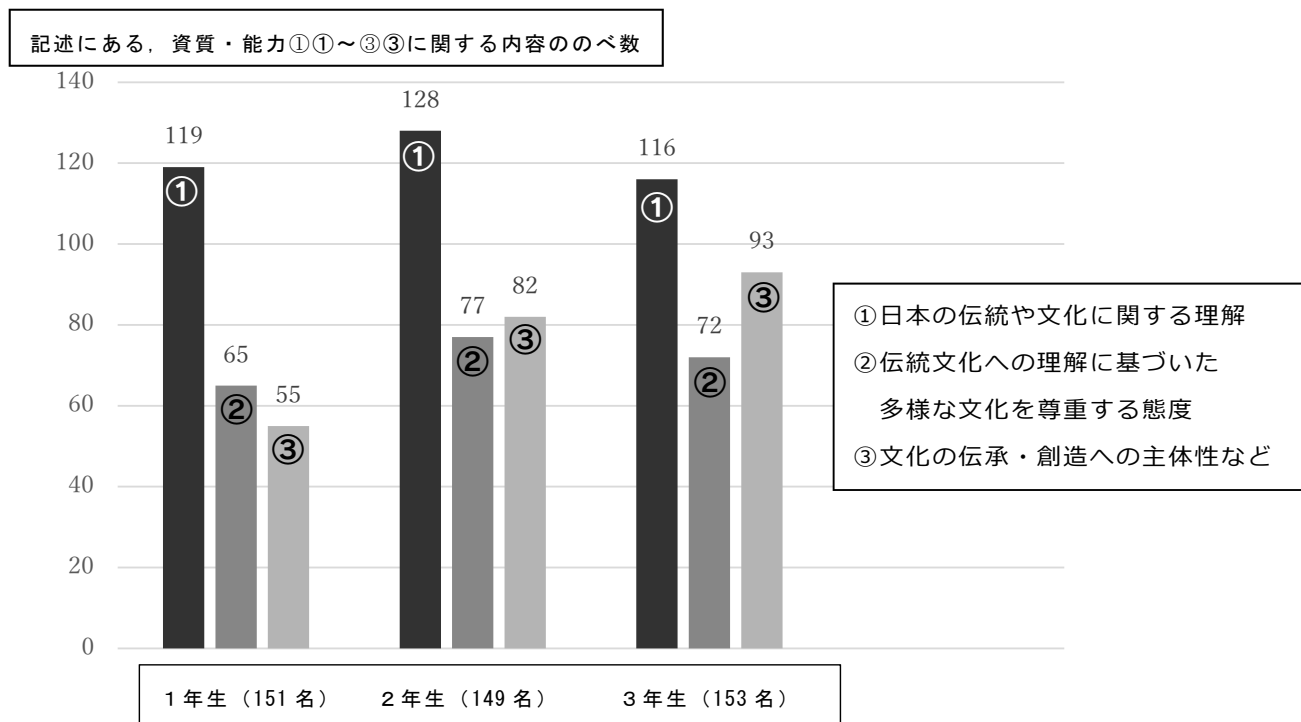
伝統文化に関する学習を行ったことで、どのような変化がありましたか。



全校生徒453名に「伝統文化に関する学習を行ったことで、どのような変化がありましたか。」の問いでアンケートを行った結果、98%に当たる444名が何らかの記述をした。学年ごとに見ると、二年生は全ての生徒が何らかの変化についての記述があり、一年生の4名、三年生の5名が未記入または「なし」「わからない」と答えたものの、ほとんどの生徒が、伝統文化教育によって、何らかの変化があったと感じていることがわかる結果となった。



記述の内容について



昨年度との比較をするために、アンケートの内容・実施方法などは、昨年度と同様とした。資質・能力①～③が、各生徒の中で育まれているのかをアンケートの記述より見取り、学年ごとの記述数を示したのが、上のグラフである。以下に、記述の例を示す。

- 「① 日本の伝統や文化に関する理解」に関する記述
- 「② 伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度」に関する記述
- 「③ 文化の伝承・創造への主体性など」に関する記述

普段の生活の中で、伝統的なものと現代のもの、新しいものとも比べて物事を考えたり、ニュース等で報道されている② 伝統文化に関する内容に ① 興味をもつことが多くなったように思う。

二年男子

・金沢には、沢山の伝統文化があるとわかった。
 ・① 伝統文化は詳しくない、③ 継承していきたいと思、
 ・授業等で初めて知った伝統文化などを、家族や
 友達に話した。・外国人に③ 伝統文化を教えた。
 ・金沢の③ 伝統文化の体験に参加した。

二年女子

自分たちのところに
 こんな素晴らしい文化があるのなら、
 ② 他の国にも同じようにあるのかと
考えました。

1年男子

今まで伝統文化は古い物だなと思、ていたが、
 いろいろな人が伝えてきたんだとか、① こういう見方が
 あるのかなど、③ 伝統文化に対する自分の見る目が
変わったと① 思います。
 ・日本以外にも② 世界の伝統を知りたくなった。

1年男子

① 身近なものにも伝統文化が関係していること
が分かった。
 ・他の国の文化を知りたいと思うようになった。

1年女子

私はもともと他国の文化もして、② お互いの理解を深め合うことが大事だな、と思いました。もちろん自分の国の文化を知った上で、③ 他国の人も知らない人達に、自分の国の文化を発信していくこともしたいと思いました。

1年女子

① 伝統文化に関して、なぜあんなに全世界から必要なのか
などを、教科の学習を交えて考えることができる。

3年男子

その伝統文化に少し興味をもった。
② 伝統文化の継承について少し考えるようになった。
③ 能や狂言、歌舞伎を1回生で見たいと思った。

3年男子

覚えきれないほどたくさんの伝統文化が
② 世界にはあることがあった。
それが消えないように、③ 何気なくしるまいに
参加した。

3年男子